

難聴児支援に関する アンケート調査について (職員用調査結果)



調査の概要

1 調査の目的

北海道における難聴児への支援体制を検討するに当たり、難聴児の保護者及び支援に携わる職員の意見を把握するため実施。

2 調査対象者

道内（指定都市・中核市を含む。）の難聴児の保護者及び調査対象施設において難聴児支援に携わっている職員（18歳までの難聴児の関係者を中心とするが、過去に携わっていた職員等も含める。）

3 調査対象施設

児童発達支援センター、児童発達支援事業所、放課後等デイサービス、聾学校（乳幼児相談室）、保育所、認定こども園、家庭的保育事業所、小規模保育事業所、事業所内保育事業所、認可外保育施設、幼稚園、特別支援学校幼稚部

4 調査方法 ※北海道のHPにも様式と併せて掲載し、周知した。

- ・保護者：3の調査対象施設や市町村障がい福祉主管課及び子ども関係課、小・中学校（義務教育学校を含む。）、高校、特別支援学校を通じ、アンケート調査について周知。
- ・職員：3の調査対象施設を通じ、アンケート調査について周知。

5 回答方法

保護者・職員がWebから直接回答又はメール・FAX提出

※保護者調査票については、複数の難聴児を育てている場合、お子さんごとに回答いただいた。

基本的に全質問任意回答とした（例外：その他を選択した場合は、その他の内容の記入は必須とした。）。

※職員調査票については、複数の難聴児の支援に携わった場合、まとめて回答いただいた。

6 調査期間

令和7年（2025年）1月31日（金）～3月2日（日）

調査結果の表示方法

回答は各質問の回答者数（N）を基礎とした百分率（%）で示す。また、小数点以下第2位を四捨五入しているため、内訳の合計が100%にならない場合がある。

複数回答が可能な設問の場合、回答者が全体に対してどのくらいの比率であるかという見方になるため、回答の比率の合計が100%を超える場合がある。

その他の内容など自由記述の回答は、一部抜粋や要約を行っている。

職員調査結果

全回答者数：159

①現在勤務している事業所等が所在する市町村がある振興局管内等

振興局管内等	人数	%	振興局管内等	人数	%
空知	8	5.0	上川（旭川市を除く。）	3	1.9
石狩（札幌市を除く。）	22	13.8	旭川市	14	8.8
札幌市	44	27.7	留萌	1	0.6
後志	4	2.5	宗谷	1	0.6
胆振	16	10.1	オホーツク	11	6.9
日高	0	0	十勝	10	6.3
渡島（函館市を除く。）	2	1.3	釧路	6	3.8
函館市	7	4.4	根室	5	3.1
檜山	2	1.3	無回答	3	1.9

職員調査結果

全回答者数：159

②現在勤務している事業所等の種別

種別	人数	%	種別	人数	%
児童発達支援事業所（児童発達支援センターを含む。）	43	27.0	事業所内保育事業所	0	0
放課後等デイサービス	18	11.3	認可外保育施設	0	0
聾学校の乳幼児相談室	15	9.4	幼稚園	4	2.5
保育所	13	8.2	特別支援学校幼稚部	8	5.0
認定こども園	21	13.2	その他	33	20.8
家庭的保育事業所	0	0	無回答	1	0.6
小規模保育事業所	3	1.9			

（その他）

聾学校（乳幼児相談室以外）、特別支援学校（幼稚部以外）
 小学校・中学校、高校（過去に勤務）
 道立施設、開業言語聴覚士、相談支援事業所
 市町村役場、地域の手話サークル

職員調査結果

全回答者数：159

③これまでに勤務したことのある事業所等のうち、難聴児の療育に関する業務を担当した事業所等（複数選択可）

種別	人数	%	種別	人数	%
児童発達支援事業所（児童発達支援センターを含む。）	47	29.6	事業所内保育事業所	0	0
放課後等デイサービス	33	20.8	認可外保育施設	2	1.3
聾学校の乳幼児相談室	20	12.6	幼稚園	8	5.0
保育所	21	13.2	特別支援学校幼稚部	20	12.6
認定こども園	13	8.2	その他	17	10.7
家庭的保育事業所	0	0	無回答	25	15.7
小規模保育事業所	3	1.9			

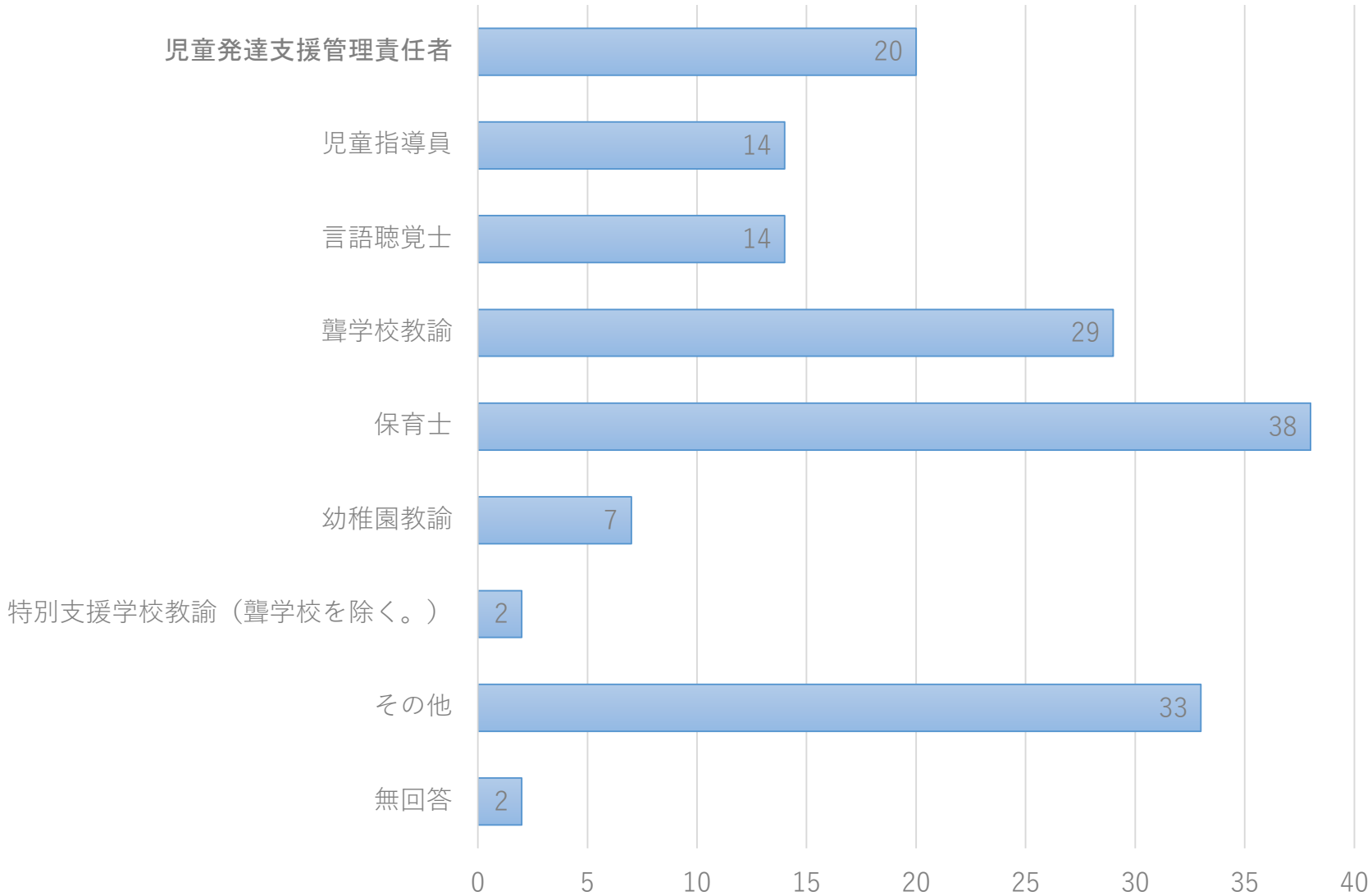
（その他）

聾学校（乳幼児相談室以外）、特別支援学校（幼稚部以外）
小学校・中学校、診療所、道立施設、入所施設

職員調査結果

全回答者数：159

④現在の職種



（その他）

准看護師、看護師、社会福祉士
理学療法士、作業療法士、音楽療法士
療育支援員、相談支援専門員
保育教諭、小学校教諭、中学校教諭
園長・施設長、経営・管理者
手話通訳者

職員調査結果

全回答者数：159

⑤支援に携わっている（携わった）難聴のお子さんで最も小さかった子の年齢

年齢	人数	%	年齢	人数	%	年齢	人数	%
0歳	25	15.7	うち10か月	2	1.3	8歳	4	2.5
うち1か月	2	1.3	うち11か月	0	0	9歳	3	1.9
うち2か月	3	1.9	うち無回答	1	0.6	10歳	1	0.6
うち3か月	1	0.6	1歳	23	14.5	11歳	3	1.9
うち4か月	4	2.5	2歳	25	15.7	12歳	7	4.4
うち5か月	6	3.8	3歳	22	13.8	13歳	2	1.3
うち6か月	6	3.8	4歳	7	4.4	14歳	1	0.6
うち7か月	0	0	5歳	5	3.1	無回答	20	12.6
うち8か月	0	0	6歳	6	3.8			
うち9か月	0	0	7歳	5	3.1			

職員調査結果

全回答者数：159

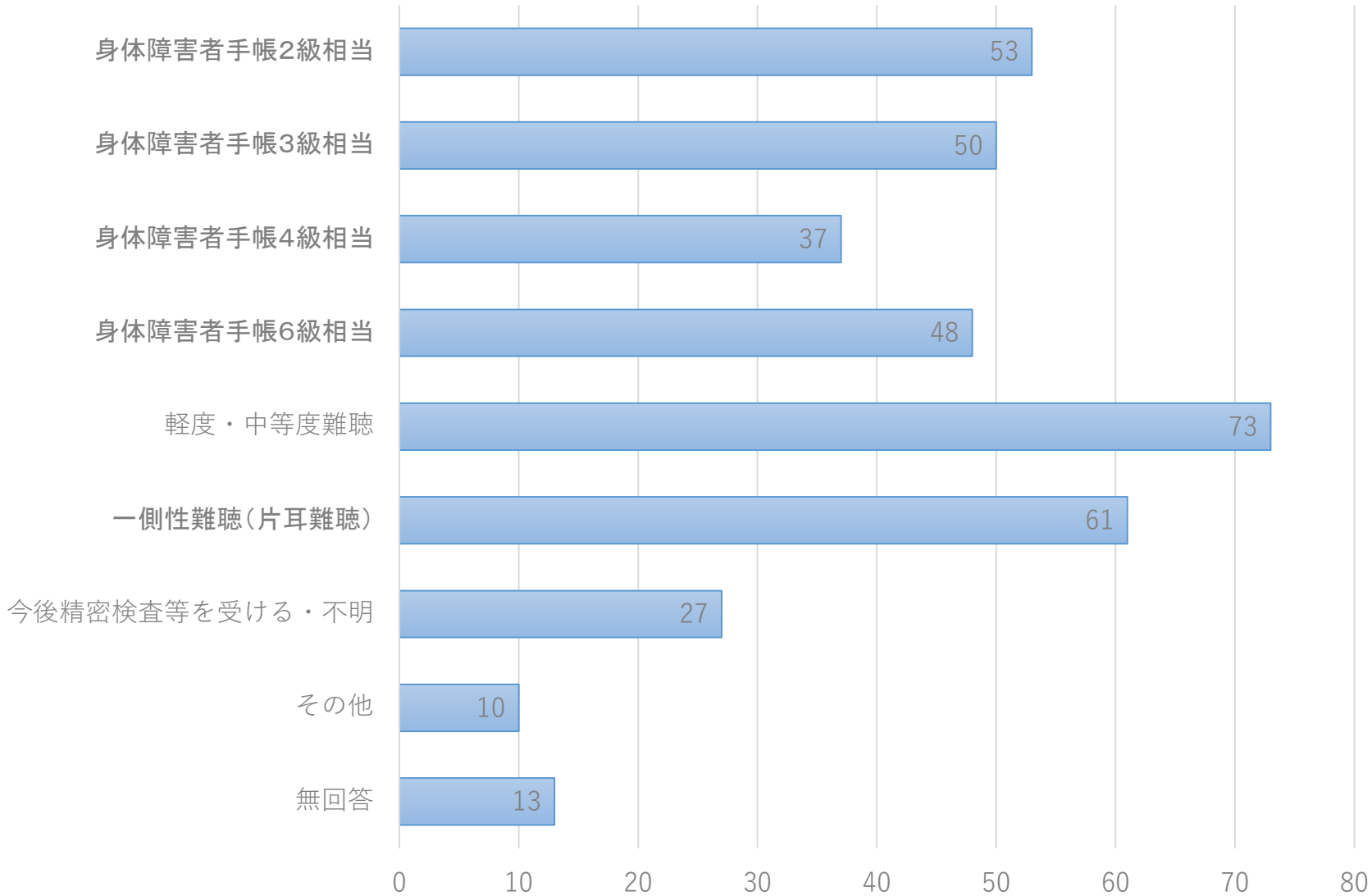
⑤支援に携わっている（携わった）難聴のお子さんで最も大きかった子の年齢

年齢	人数	%	年齢	人数	%	年齢	人数	%
0歳	0	0	8歳	4	2.5	16歳	1	0.6
1歳	6	3.8	9歳	3	1.9	17歳	3	1.9
2歳	4	2.5	10歳	6	3.8	18歳	8	5.0
3歳	8	5.0	11歳	6	3.8	19歳	1	0.6
4歳	8	5.0	12歳	13	8.2	20歳	1	0.6
5歳	12	7.5	13歳	1	0.6	21歳	0	0
6歳	24	15.1	14歳	2	1.3	22歳	1	0.6
7歳	10	6.3	15歳	14	8.8	無回答	23	14.5

職員調査結果

全回答者数：159

⑦支援に携わったことのある難聴児の難聴の程度（複数選択可）

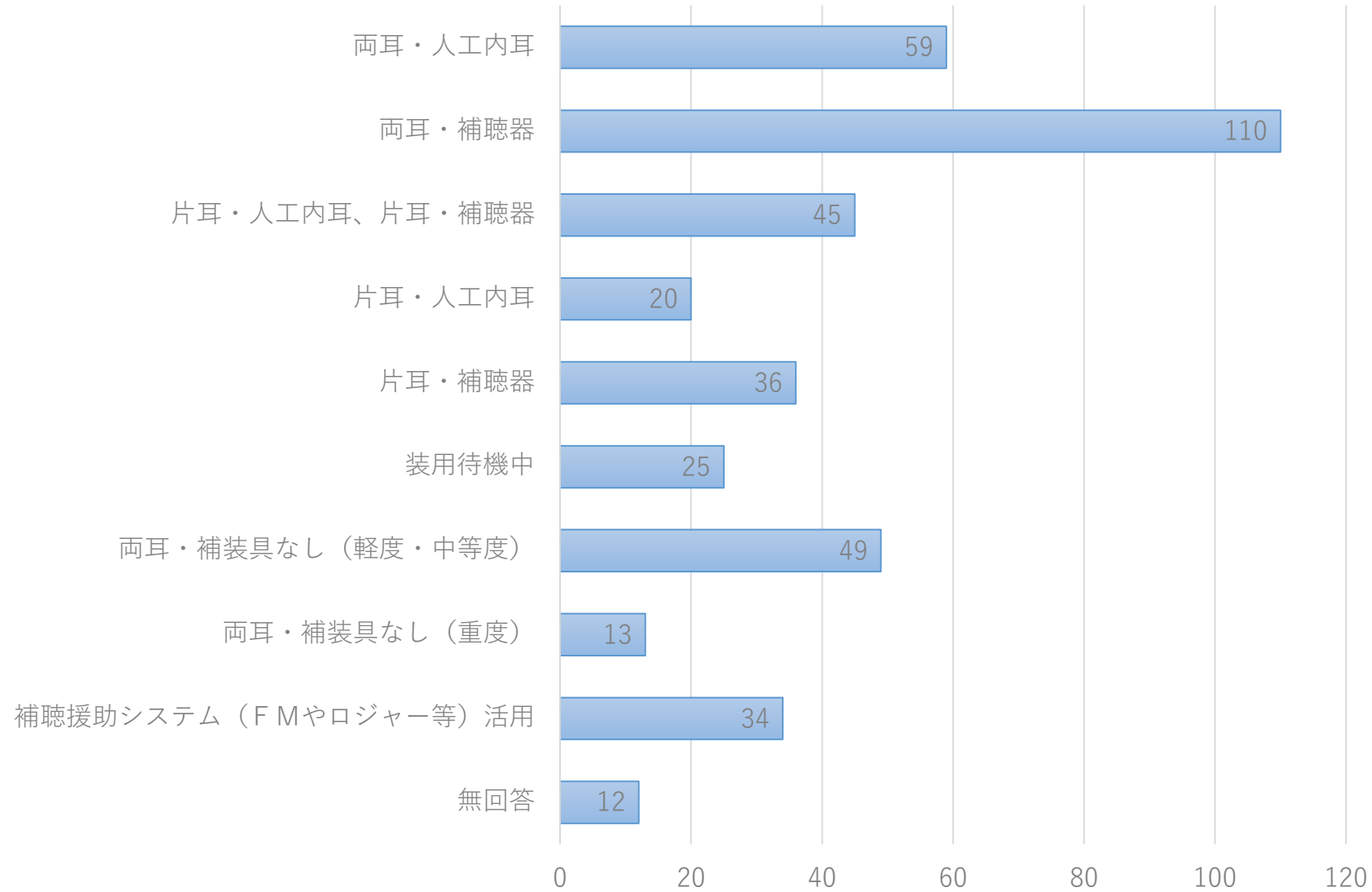


(その他)
・ APDや聴こえに何らかの難しさがある子ども
・ 中等度感音性難聴
・ 機能性難聴
・ 慢性的な滲出性中耳炎による聞こえにくさ

職員調査結果

全回答者数：159

⑧支援に携わったことのある難聴児の難聴の補聴状況（複数選択可）



職員調査結果

全回答者数：159

⑨支援に携わったことのある難聴児の難聴以外の障害・疾患（複数選択可）

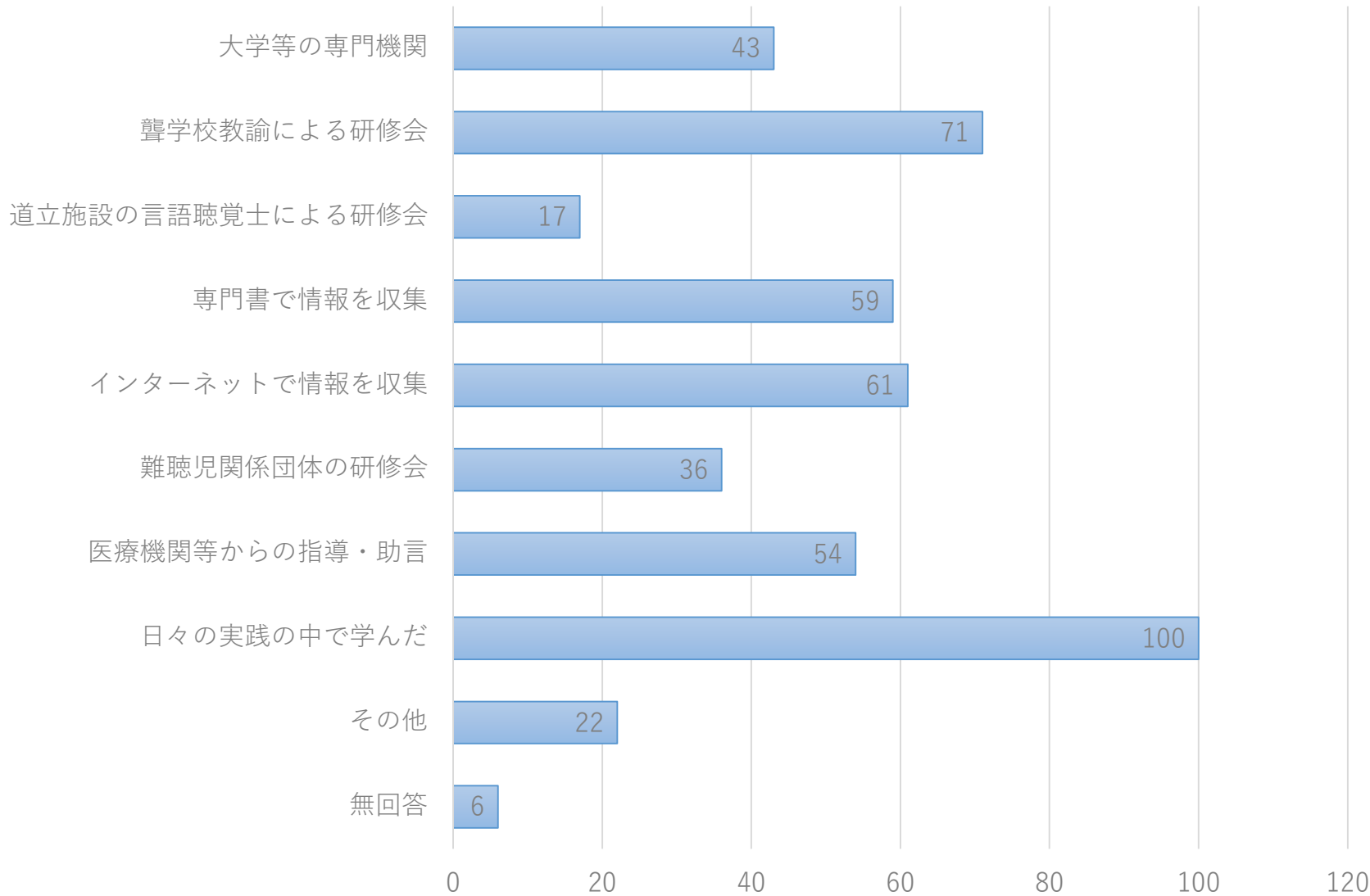
障害・疾患	人数	%	障害・疾患	人数	%
視覚障害	20	12.6	先天性サイトメガロウイルス感染症	24	15.1
肢体不自由	37	23.3	先天性風疹症候群	4	2.5
内部障害	10	6.3	先天梅毒	1	0.6
知的障害	77	48.4	難聴以外の障害は未診断又は把握していない	31	19.5
発達障害 （自閉症スペクトラム等）	69	43.4	その他	10	6.3
言語障害	32	20.1	無回答	33	20.8
重症心身障害	14	8.8			

（その他）
APD、聴覚過敏、ダウン症などの染色体系、学習障害（LD）、ADHD

職員調査結果

全回答者数：159

⑩難聴児に係る療育についてどのように学んだか（複数選択可）



（その他）

- ・ 言語聴覚士・聾学校教諭等からの助言・指導
- ・ 難聴児の家族からの情報収集（医療機関から聞いた集団の中での留意事項等）
- ・ 保護者が人工内耳、補聴器の取扱説明書を作成
- ・ 手話サークル
- ・ 自身が難聴児の親であり、これまでの子育ての中で学んだ
- ・ 教育職員免許法認定講習（聴覚）
- ・ 大学教授の講演会
- ・ 国内及び海外の論文・学会
- ・ 研究機関や相談機関での実務
- ・ ケースカンファレンス
- ・ ほぼ知らないまま関わっている

職員調査結果

全回答者数：159

⑪⑩のように難聴児に係る療育について学んだことについて良かった点、不満があった点（自由記述）

＜良かった点＞

- ・ 幼児の療育現場や利用児の授業風景を見学させてもらい、難聴児への理解と場面に応じた対応方法等を具体的に知ることができた。
- ・ 難聴児の就学、就労について知ることが出来た。
- ・ 難聴児支援事業において研修会を開いてもらった。一側性難聴のお子さんへの配慮方法等を具体的に聞くことができ、また 関係機関で共有することができ、よかった。
- ・ オーディオグラムの読み方など基本的なことを教えてもらったり、日常生活の疑問など丁寧に答えてもらった。
- ・ ユニバーサルデザインの教育実践につながった。
- ・ 聾学校教諭による研修が、現場の様子を交えての研修会だったので、わかりやすかった。
- ・ 医療機関からの助言で関わりやすくなった。家庭とも情報が共有しやすかった。
- ・ 難聴児に対するアセスメント方法を専門の方から教わり、その場で実践することで、学んだ療育方法が自分に身についていることを実感する。
- ・ 日々の実践から、当事者になったつもりで自分の療育を振り返り、どのような声かけやジェスチャーをすれば本児が安心して、楽しく過ごすことが出来るかを模索している。それを実践することで児童の反応を伺い自分なりに分析し、次に活かしている。
- ・ 難聴児の療育に関わる研修がオンラインで行われることが多くなった。より多くの情報を得ることができる。参集の研修会に参加することで、多くの人とつながることができる良さがある。実際の療育場面を見せてもらえる研修や動画を見せてもらえる研修はとても参考になる。
- ・ 医学面や補聴器・人工内耳は日々新しくなっていくことも多いので、最新の情報を収集することができると、大変参考になる。

＜その他＞

- ・ インターネットは、あくまでも参考にしかない。詳細は、研修会などで直接学ぶ事が大事。
- ・ 一番の学びは日々、様々な難聴児に関わり続けることにあると感じる。ノウハウが全く通用しないこともある。支援者としては、それだけ多様なケースがあることを理解した上で療育にあたるべき。

職員調査結果

全回答者数：159

⑪⑩のように難聴児に係る療育について学んだことについて良かった点、不満があった点（自由記述）

<不満があった点>

- ・北海道には、聾学校教諭の免許が取れる教育機関がないため、北海道の聾学校教諭は、聾学校教諭になってから聴覚障がい教育について学ぶことになる。このことは、即戦力として教壇に立たなければならない教員の現状から課題が大きいと考える。
- ・聾学校では、先輩方から専門的な知識や技能を教えてもらうことができた。しかし、先輩が転勤及び退職するなどして専門性を継承することが難しくなる。北海道にも自立活動に特化した教員を各校に配置してほしいと願っている。
- ・研修会や専門書など、高額であっても、原則自己負担であること、北海道に聴覚障害領域の教員免許状を出せる大学がなく、専門性を高めるためには、自腹を切って道外に行かなくてはならないことが不満。
- ・聞こえ以外の問題がありそうだったが、その点について、検査や他機関への繋がりを持つことが難しかった。聞こえの問題かどうか把握しづらい。
- ・重症心身障害児の聞こえの支援について、専門的な学びがよりあるといいと考える。
- ・実際の関わりにあてはまらないこともあった。
- ・医療、療育、教育などのネットワークが確立され、円滑に機能していて、研修や日常的な協力体制があると良かった。
- ・難聴児の療育に必要な知識がとても多岐にわたっていて（医療、医療機器、福祉、教育、子育て、妊娠出産、心理的なことなど）、どの分野からどのような方法で知識を身につければ良いのか困った。
校内に知識のある方がいれば教えてもらうことができるが、1人で療育担当となるとより難しいだろうと感じている。
- ・学びながら実践しているが、発音や聞こえなどの指導の方向性について、専門的立場の方から助言をもらいたい。
- ・スーパービジョンを受ける機会が少ないこと
- ・難聴の研修会は主に教員向けであり、医療職に対しての研修が少ない。
- ・言語聴覚士養成課程では必修の内容だが、時間数は限られており現場に出てから自力で学ぶ必要がある。
特に軽度・中等度難聴児の支援についての情報が得られにくいことに不満がある。補聴器メーカー主催の勉強会くらいしかない。
- ・実戦の中で学ぶことは次の実戦に活かせるメリットを感じた。しかし実戦の場では解決できないことも多く、他の事業所との連携や研修や医療関係者ともっと手軽に連携がとりたかった。また、医療関係者に難聴の子供への教育面でのアプローチを知ってほしい。
- ・難聴児の支援に関する支援課程がまだまだ不足していて、しっかりしたカリキュラムがないと感じる。
- ・関わっている児童の中で難聴児の割合は少なく、数年に数ケースであるため、知識を忘れてしまう。
- ・人工内耳も含め医療的な処置等日々日進月歩のため最新知見に追いつけず、ネット上に情報はあがるが、目の前の子供に該当するものは何か見極めが難しい。
- ・地域の事業所では関わるケースの人数が少ないので、知識や実践の経験等の積み重ねが難しいと感じている。
- ・難聴について、教科書上で少ししか学んでおらず、体験などあればもう少し親身に考えられたと思う。

職員調査結果

全回答者数：159

⑫難聴児に係る療育について学ぶ際、どのような情報やプログラムが必要又はあると望ましいか（複数選択可）

情報・プログラム	人数	%	情報・プログラム	人数	%
医療機関等の情報	91	57.2	聾学校教諭による療育方法等の実践的な研修	84	52.8
他の療育機関等の情報	69	43.4	医師による療育方法等の実践的な研修	45	28.3
市町村の相談先の情報	57	35.8	他療育機関等との情報共有・意見交換の場の設定	56	35.2
支援の流れ（治療・療育等）の情報	100	62.9	療育を行っている施設等での見学・実習	74	46.5
きこえの仕組み等に関する基本的な知識を修得するための研修	83	52.2	難聴体験	62	39.0
難聴児等への関わり（保護者対応を含む。）について修得するための研修	115	72.3	その他	7	4.4
言語聴覚士による療育方法等の実践的な研修	88	55.3	無回答	4	2.5

（その他）難聴に対応できる児童発達支援センター等がない複数自治体間による連携の場
作業療法士など専門職の常駐による助言・指導、難聴児当事者や保護者の講話・交流会
補聴器、人工内耳、支援機器等の開発メーカーからの発信

職員調査結果

全回答者数：159

⑫難聴児に係る療育についてどのようなことをしているか（複数選択可）

療育内容	人数	%	療育内容	人数	%	療育内容	人数	%
聴覚障害についての説明	51	32.1	言語発達支援について具体的な方法の説明や支援	54	34.0	講演会や学習会の機会の提供	33	20.8
お子さん自身のきこえについての説明	62	39.0	おもちゃ、絵、絵本などいろいろな教材の扱い方についての説明や支援	55	34.6	保育所や幼稚園に関する相談への対応	41	25.8
補聴器についての説明	45	28.3	福祉制度、利用方法などについての情報の提供と説明	37	23.3	相談機関（窓口）についての情報の提供	32	20.1
人工内耳についての説明	33	20.8	お子さんのこと、家族のことなど個別の悩み、困り感の相談への対応	93	58.5	療育機関等についての情報の提供	36	22.6
聴覚活用について日常生活の中で具体的な方法の説明と支援	55	34.6	障害を受け止めることについての悩み、相談への助言や支援	44	27.7	医療機関等についての情報の提供	34	21.4
手話についての説明、実際の活用についての支援	51	32.1	保護者同士の交流や話し合いの場の設定	38	23.9	その他	7	4.4
具体的な育児、発達促進に関する説明や支援	69	43.4	3歳児からの進路についての様々な情報の提供	36	22.6	無回答	14	8.8
お子さんとのコミュニケーションの取り方の具体的な方法の説明や支援	93	58.5	小学校以上の教育や将来についての情報の提供	57	35.8			

（その他）片耳難聴のため、指示がしっかりと聞こえるような環境調整に配慮
 聴覚活用を目的とした音楽療法の実施、保護者がパート勤務しやすいように療育の受入を工夫、訪問しての巡回相談園での生活の中で他児とのコミュニケーションがスムーズに取れるように間に入ってお互いの気持ちを伝える手伝いをしたり、一斉保育で一緒に活動が出来るように個別に援助して楽しめるように配慮

全回答者数：159

⑭⑬の実践についてやって良かったもの、不十分だったと思うもの（自由記述）

＜良かったもの＞

- ・ **保護者同士の交流は、実際的な研修に結び付くケースが多い。**PTA研修などで、話を聞いたり、実際に出向いて様々な現場（支援の場、お子さんの学ぶ場、就労先等）を見たり体験したりすることは大きな学びになっていると思う。
- ・ 講師として話すこととして、**「幅広い情報を得てから判断しましょう」ということを伝えている。**
特に新スクでリファアになったお子さんの保護者に対し、「人工内耳を装用すれば聞こえるお子さんと同じように過ごせます」という趣旨のことを伝える医師がいまだに存在する。医師の言葉という情報だけを拠りどころにして人工内耳を装用したものの、その後全くうまくいかず親子共々困り果てているケースもたくさん見てきた。保護者が多くの選択肢を得てから判断できるような支援のあり方が必要である。
- ・ 様々な**本人が困難であろう事例を記録**しておき、専門家に直接聴いて、対策を教えてもらったのが、良かったと思っている。
- ・ 各ご家庭の悩みに応じた専門機関の情報周知等を行い、心配や不安に対する軽減に少しでもつなげることができた。
- ・ 保護者から補聴器についての説明、取り付け取り外しの説明を受け、他の職員にも情報共有したことで、クラスの職員全員が理解把握し、日々の保育で意識できたこと。
- ・ 医師からの話と教師からの話に食い違いがあると、保護者が混乱することがあり、**医療機関と連携して保護者支援**を行なったことがあった。
- ・ 実際に利用している聾学校での療育を見学し、保護者と担当教諭とカンファレンスを行い、情報共有等連携をすることができた。
- ・ 聾者の先輩の体験話、ろうモデル、デフリンピックの情報
- ・ **補聴援助システム導入に向けて小学校や教育委員会、保護者で情報共有**を行った。結果的に学校備品として購入され、児童が使用できる体制が整った。
- ・ 周りの児童への本児持つ特徴の説明を実施できて良かった。

全回答者数：159

⑭⑬の実践についてやって良かったもの、不十分だったと思うもの（自由記述）

<不十分だったもの>

- ・子どもの成長には保護者の協力が不可欠な部分が多くあるが、**働く保護者が増えた**ことで、学びの場を提供しようとしても**なかなか参加者が集まらない**ことが多い。学校で全ての役割を果たしていくことは難しいと感じる場面がある。
- ・手話を使用しての療育を行う際に、支援者側の手話の知識不足。
- ・市町村立学校だと、設備の関係で、**児童の聞こえに配慮した教育環境になっていない**。
- ・就学についての説明。保護者に対して早くから教育委員会に相談に行くよう、積極的に勧めるべきだった。
- ・**保護者は、特別支援学級（難聴）、通級、特別支援学校の違いからよく分かっていないので**、各々の説明と、それぞれに通った場合のメリット・デメリットについての**説明が必要**。
- ・当地域は、通常学級に在籍して、『難聴』の通級指導を受けられるのかどうかも不明。それぞれの地域で加配数が少ない中で教育を行い、一担当一障害になっていない場合もあるように感じる。札幌のように、ことば・まなび・きこえ・ひとみと、必要に応じてそれぞれの通級が揃えられるように加配の教員をつけてほしい。
- ・行政機関窓口（教育委員会、障害福祉課）の相談窓口を保護者へ紹介したが、**手帳対象ではないことを理由に十分な支援や説明が受けられなかった**。
- ・**福祉制度については知識が不足していた**。
- ・医療や適切な相談窓口などの知識を養っていきたい。
- ・保護者も聴覚障害者だったため、子どもの聞こえについて、早期から声かけをしていたが、現状を受け入れ検査等受けてもらうのに時間がかかってしまった。
- ・鼻咽腔構音の指導の難しさ、児童の理解力など難聴とは別の問題での支援の難しさがある。
- ・保護者が理解できるように対応に努めているが、**一度にたくさんの情報を提示しすぎて良くなかった場合もあった**。少しずつのほうがよかったと反省している。

職員調査結果

全回答者数：159

⑮難聴児に係る療育についてご自身の相談先（複数選択可）

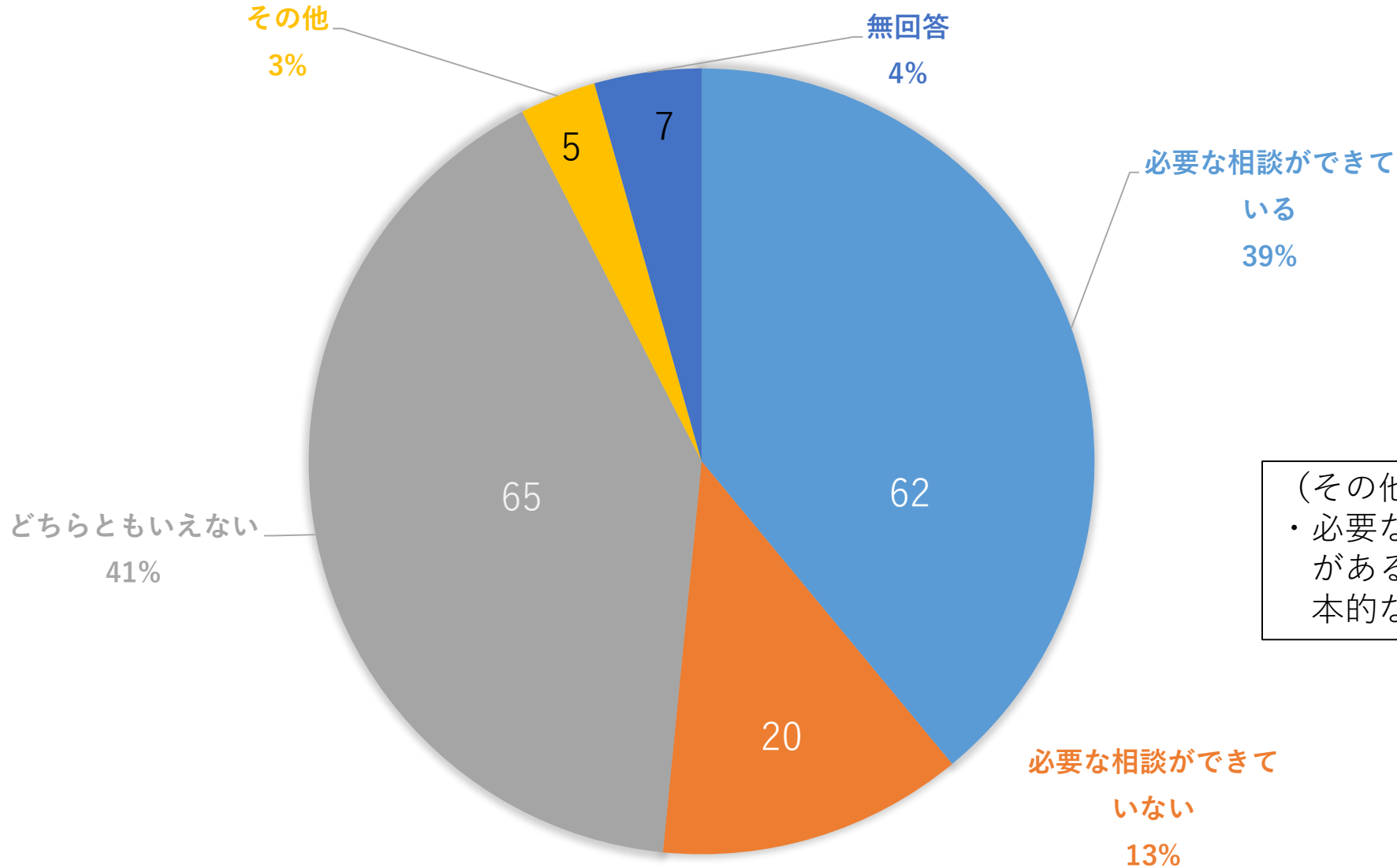
（その他）
難聴当事者、心理士、理学療法士、作業療法士、
大学教授、特別支援教育センター、補聴器店、
ウェブサイトで調べる

相談先	人数	%	相談先	人数	%
医師	28	17.6	行政機関の職員	24	15.1
看護師	4	2.5	学校・保育所等の教職員	39	24.5
医療ソーシャルワーカー （メディカルソーシャルワーカー）	2	1.3	難聴児関連団体	15	9.4
言語聴覚士	53	33.3	難聴児の保護者	30	18.9
保健師	28	17.6	SNS	6	3.8
児童発達支援事業所（児童発達支援センターを含む。）や放課後等デイサービスの職員	42	26.4	その他	15	9.4
聾学校（乳幼児相談室を含む。）の教職員	80	50.3	無回答	6	3.8

職員調査結果

全回答者数：159

⑩これまで難聴児の療育に関し、必要な相談はできているか。



(その他)
・必要な相談がそもそも分からないことがあるため、まずは難聴児に対する基本的な知識を学べる講演会に参加したい

職員調査結果

全回答者数：159

⑰難聴児の療育に関する相談をするに当たって、どのような点を重視するか。

項目	最も重視するもの		2番目に重視するもの		3番目に重視するもの	
	人数	%	人数	%	人数	%
事業所に訪問してもらって相談することができる	72	45.3	50	31.4	20	12.6
事業所から通える距離で相談することができる	33	20.8	44	27.7	26	16.4
事業所からオンラインで相談することができる	7	4.4	30	18.9	55	34.6
事業所から遠方にあるが、専門的な知見を有する人に対面又はオンラインで相談することができる	32	20.1	19	11.9	42	26.4
その他	7	4.4	5	3.1	6	3.8
無回答	8	5.0	11	6.9	10	6.3

職員調査結果

全回答者数：159

⑰難聴児の療育に関する相談をするに当たって、どのような点を重視するか「その他」の内容

<相談体制>

- ・相談するための金銭的な支援（交通費等）や遠隔（オンライン）による相談が選べるなど、**様々な選択肢が用意される必要がある**と思う。
準備する側の都合ではなく、利用する方の都合に合わせた細かな支援体制が望まれる。
- ・**関係機関と連携を取れること。**
- ・待たずに相談できること。
- ・いつでも相談できること。

<相談員の資質>

- ・難聴だけではなく、それに伴う言語発達や構音の問題、発達障害や肢体不自由など、**発達全体をみることができ、それが難聴によってどのような影響を受けているのかについて一緒に考えてくれる専門的な知見を有する人に相談したい。**
- ・誰に相談するかが重要で、アクセスは関係ない。

<直接支援>

- ・個人的には**オンラインの支援よりも直接支援が有効**だと思う。
保護者向けの相談であればオンラインでも代用できると思うが、子どもへの支援ではやはり直接支援がいいのではないかと思う。
- ・オンラインで相談することの有効性をまだ実感できていないので、訪問による直接支援以外の選択肢が思いつかない。
子どもの支援や職員への教示などは、講師が行う場面を見て真似をすることが職員のスキルアップに繋がると思う。
オンラインの方が回数は多く取れるかもしれないが、1回の支援の学びの深さは訪問の方があると思う。

<その他>

- ・担当医への質問事項を保護者に伝え、一緒に育てていけるように考えている。

職員調査結果

全回答者数：159

⑩難聴児に療育に関する相談について、どのような人が相談対応してくれるといいか（複数選択可）

相談先	人数	%	相談先	人数	%
医師	72	45.3	行政機関の職員	29	18.2
看護師	10	6.3	学校・保育所等の教職員	38	23.9
医療ソーシャルワーカー （メディカルソーシャルワーカー）	35	22.0	難聴児関連団体	39	24.5
言語聴覚士	117	73.6	難聴児の保護者	0	0
保健師	39	24.5	その他	4	2.5
児童発達支援事業所（児童発達支援センターを含む。）や放課後等デイサービスの職員	54	34.0	無回答	7	4.4
聾学校（乳幼児相談室を含む。）の教職員	113	71.1			

（その他）心理師（心理士）

職員調査結果

全回答者数：159

⑰難聴児に係る療育についてその他ご意見や現在困っていること等。（自由記述）

<体制関係>

※別紙のとおり。

<研修関係>

- ・ 保健師を地区別に集めて、研修会ができればと思う。
- ・ ケース数が少ないので、関わる職員のスキルが積み重ならないと感じる。幸い日帰りができる範囲に支援学校があるので、そちらに依頼をして訪問支援をしてもらっていた。地域柄周辺の事情も鑑みると、現状ではこれが精一杯なのかなと思う。
- ・ 療育の是非についてスーパービジョンを受けられる機会が欲しい。
- ・ 聾学校に入る為の制度や条件があれば知りたい。また、難聴児に対する基本的な支援や難聴の原因と思われる疾患など、それに伴って誘発する病や障害などを知りたい。
- ・ 難聴に発達障害などの他の障害が合併する重複障害児の療育は、試行錯誤で、工夫の必要性を強く感じた。重複障害児の療育についても、研修などで具体的に話を聞いて、学ぶ機会が増えると良いなと思う。
- ・ 以前、研修で詳しい支援方法について質問したが、一人ひとり支援方法が違うため実際に様子を見てみないとわからないと言われたことがあった。もちろんそれはそうだと思うが、近くに聾学校等の専門の事業所が無いため、その相談も難しい状況であること。
- ・ 他機関ではどのような療育が行われているのかを知りたい。
- ・ 難聴児の音楽に関する知見のある方、音楽の療育に携わっている方を紹介していただきたい。

<療育関係>

- ・ 難聴児本人だけでなく両親ともに難聴者の場合の対応
- ・ 診断は出ていないが難聴の他に自閉傾向のあるお子さんへの療育や対応に困る事が多い。

<その他>

- ・ 聞こえにくさについての理解、補聴器装用や人工内耳が必要なほどの難聴の理解が、広く一般に広がるとよい。